四旬節第４主日

福音朗読：ルカ 15･1-3、11-32

2025.3.30　9：30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭　高木健次神父

今日は四旬節の第４主日です。四旬節はまだあと２週間ございますが、この第４主日はもう間もなく復活が近いという、まだそれは来ていないけれども、もう確実に来るのだというその喜びを表すピンク色の典礼色を使うことができるということになっているので、今日は司祭とそして助祭のストラはピンクです。

ところで、先日教会学校で、ある子が、神父さんが福音を読んだ最後にゴニョゴニョ言っているのは何て言ってるんですかっていうご質問があったんです。

ゴニョゴニョ言っています。で、何と言っているかと言うと、「福音の言葉によってわたしたちが罪から清められますように」っていうお祈りを唱えているんですが、「静かに唱える」っていう指示があるんです。その他にもミサの中で「司祭が静かに唱える」という指示が典礼書に出ている所が何箇所かあります。で、どのくらい静かにかっていうのがはっきり分からないので、わたしの場合はゴニョゴニョ言うということになっております。

聖書の福音書を朗読するたびごとに「福音の言葉によってわたしたちが罪から清められますように」っていう祈りをするということは、聖書を通して、わたしたちが神様との間に自ら作ってしまった溝、あるいは神様の恵みが入ってこないように心の目や耳を塞いでしまう、そういう自分たちの思いや行いから清められて、神様とのつながりをより深くいただくことができるように、という意味です。

で、そのためにどうしたらいいのかというのをイエス様が福音書を通して示してくださっている、ということを毎回思い起こすのが、福音書の朗読の最後に小さく唱えるお祈りということができると思います。

今日の福音では、有名なたとえ話をイエス様が語ってくださったというところが朗読されました。その中でも、わたしたちが清められなければならない２種類のと言いましょうか――それは互いにつながっていますが――、二つのタイプの罪、あるいは神様と自分を隔立ててしまうそういう行いや考え方が示されていたかなというふうに思うんです。

一つは、分かりやすいです。「弟」の息子というふうに出てきました。「もらうものはもらいたい。だけど、父の家にはいたくない」っていう、わたしたちも神様からの恵みは欲しいけれども、神様――その恵みの与え主である方――のところに留まってその御心、神様が望んでいることはしたくない。でも恵みは欲しいっていうような――自分が望んでいる恵みですけど―― 一つの生き方というか、あり方が示されているかなと思うんです。

もう一つが、「兄」というふうに出てきました。これは、恵みは欲しいけれども、でも神様の御心は行いたくないということの一つの表れと言いましょうか――だからつながってはいるわけですけども――、もう一つは「自分は神様の恵みをいただきたいけれども、他(ほか)の人が同じようにその恵みに与ることは受け入れたくない」っていうことです。でも、神様が望んでいらっしゃるのは全ての人が恵みに出会うことですから、それを望んでいないということは、やっぱり「自分は恵みを欲しいけれども、神様の望みは受け入れたくない」ということの一つの表れということにはなるわけですが、少し複雑化していると言ったらいいでしょうか。自分は神様の恵みは欲しいし、神様のところに留まってその御心を行うつもりだ、と。しかしそうではない者がその恵みに与るのはいやだなということなんです。でも本当は、神様が望んでいることは、お互いが互いを受け入れ合うことなのに。

で、今日のたとえ話の最後には、財産を全て使い果たしてして戻ってきた弟が父に喜んで迎え入れられて宴会が行われているというところに、その状況に怒って家の中に入ろうとしない兄の息子を父が迎えに出てくるという場面が、このたとえ話の最後にはなっていました。その宴会の席には兄の席も準備されているんです。でも兄は入って来るでしょうか、入って来ないでしょうか、その結末は書かれていません。自分ではなくて他(ほか)の者――自分が受け入れられる、そ

れは当たり前――でも、あの者が同じ恵みに与るのが納得できない。納得できない理由を挙げればいくらでも挙げることができます。それがこのたとえ話の中で弟の息子が何をしてきたかということが詳しく説明されているくだりと言うことができますが、納得できないから自分もその恵みには入らないっていうふうに決断をするのか、それとも、同じように同じ恵みに与る者として受け入れる心で自分もその宴会の席に着くのか、選択肢は二つなんだと。自分も他の人もその同じ恵みに与ることを受け入れて自分もそこに参加するのか、それに納得できないから自分はそこに加わらないのかっていう、その二つなんだということが最後には提示されていると言うことができると思います。

色々な中で、自分の恵みは欲しいけども、でも他の人も同じように... っていう、排他的な気持ちになるということは、よくよく考えたら色々なことにあるのではないかなという気がします。ちょっと難しい話になりましたけど、でもこのことを黙想しながら、自分だったら今一番そういう場面はどうかなって考えてみると、一番最初に思い浮かんだのは――ちょっと身近すぎる例かもしれませんけど――わたしは週に何度かプールに行きます。で、一番行っているのはこの近くの杉十小学校の一般公開のプールですけど、冬の間はとっても空(す)いてるんです。夜遅い時間だったら、もうほぼ貸切りに近いというか。でもだんだん温かくなってくると、来る人が増えますから、ちょっと泳ぎにくくていやだなっていう気持ちになってくる。そういう意味では、もうずっと冬だったらいいのにって思ったりするぐらいなんですけども、でも考えたら、1時間 250 円ぐらいの安い値段でずっといつも貸切り状態だったら経営が成り立ちませんから、プールはもう終わってしまうわけです。だから本当だったら、たくさんみんなが来るっていうのは、本当にみんなが来てくれたおかげでここにずっとプールがあって、自分もその恩恵に浴しているっていうことを忘れて、そういう気持ちになってしまうんですけども、だから「いやだな、増えてくると」っていうのではなくて、「ああ、これも同じようにこのプールを楽しむ仲間同士なんだ」っていう気持ちで――お互い声をかけ合ったりするわけではありませんけれども――、もっとそういう気持ちで通おうかな、行った方がいいなというふうに、少し心を改めようかなと思ったところなんですけども。皆さんもそれぞれ、そういう何か、自分

は恵みに浴したいけれども、しかし他の人がそれに与るのはいやだっていうような場面があるんではないかな。このたとえ話は、恵みから他(た)の人を排除するっていうことは、ゆくゆくは自分自身もその恵みから排除することにつがる。これは死んだ後のことだけではないでしょう。色々な社会の――プールとか身近な例もあるけれども――こともそうかもしれません。

そのようにして、わたしたちが本当に神様の恵みに共に呼ばれているということを通して受け入れ合う心を新たにできたらと思います。それはすぐに実現してはいない、今実現してはいないけれども、神様の恵みのうちに、神が近くにおられて助けてくださるのだという、今日のこの四旬節第４主日のピンク色を用いる――「まだその恵みの時は来ていない。でもそれは神様が近くにおられて、確実にその時が来るのだ」という希望ですけども――その希望のうちに、わたしたちも回心の歩みをしたいと思います。

そして教会そのものが、また特にこの日曜日のミサが全ての人を自分の恵みに呼んでおられる神様の御心を表す、そういう機会であり続けますように。わたしたち自身とそして教会そのものの活動の上に主ご自身の導きを願いながら、このごミサを共にお捧げしたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。
PC　http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi
携帯　http://www.koenji-catholic.jp/mobile/